

絵本の読み聞かせにおける子どもの反応と絵本の主題の関係性

岸 広至

子どもの読書活動は親が与える絵本の中で行われる。子どもにとって良い絵本の第一条件は、子どもが読んで面白いと感じることであるとされているが、親は絵本の面白さだけでなく、教育的観点など様々な観点で絵本を選択する。そのため、子どもの好む絵本と親の与えたい絵本は異なることが小林（2003）によって明らかになっている。そこで本研究では、子どもが好む絵本を与えるため、子どもが好む絵本とはどのような絵本であるか明らかにすることを目的とする。

松村ら（2010）は絵本を読み聞かせた時の反応を子どもの好みととらえ、絵本の主題とその関係を調査することで、子どもの好む絵本とはどのような絵本であるか明らかにしている。具体的には、親子の読み聞かせ場面を撮影し、子供の反応の多いページと反応のないページの主題を比較している。そうすることで、加藤（2006）が明らかにした子どもが好む主題でも反応の多いページでよく出現する主題と反応のないページでよく出現する主題があることを明らかにした。しかし、この研究で使用した主題は佐々木（2000）の「子どもの心を理解するための絵本データベース」で使用されている 280 主題の内 24 主題である。また全 1146 ページ分のデータを収集したにも関わらず 100 ページ分のデータしか使用していない。そこで本研究では先行研究で収集したデータに、「子どもの心を理解するための絵本データベース」で使用されている 280 主題全てを、1146 ページ全てに付与し追加分析を行った。この分析ではある主題における子どもの反応の起こりやすさを求めた。これはある主題の付与されたページの中で、反応のあるページ数から反応のないページ数を引いたものである。

その結果、松村らが分析に用いていない「ユーモアがある」という主題が最も反応の起こりやすい主題であることが明らかになった。また、松村らの研究において子どもの興味を引かないとされた「家族」「他者を認識する」といった主題、が反応が起こりやすい主題であるという結果となった。また、この 2 つの主題はこれは、先行研究で最も興味を引きやすいとされていた「楽しむ」という主題よりも反応が起こりやすい主題であるという結果となっていた。先述の通り、本研究では松村らが使用しなかった反応回数の少ないページのデータも分析対象にしている。そのため「家族」「他者を認識する」といった主題は 1 ページ中で何度も反応が起きるような主題ではないが子どもが反応しやすい主題であると考えられる。

本研究により子供が好む絵本がどのような絵本であるかがより詳細示された。今後の課題としては、反応の取得方法の改善や複数の主題の組み合わせと子どもの関係の検討を行うことである。

（指導教員 宇陀則彦）